

# マックス・ヴェーバーとハイデルベルク大学

——人事案件・教育活動・同僚たち—— (6)

野 崎 敏 郎

## 〔抄 録〕

ラートゲンとアルトホフのめぐらした策謀は、結局ヴェーバーに察知されなかった。職務の大半をラートゲンに譲ったヴェーバーは、短期休暇を申請し、それをそのつど延長しながら、教壇への早期復帰を企てつづけたが、果たすことができず、1902年春に二回目の退任（降格）願を提出する。この頃、彼は、時間的拘束のない自由な研究活動に重点を置きつつ、限定された範囲内で教育活動の再開をも企てていた。彼は可能なかぎりハイデルベルクで学生指導に当たっており、また研究上は、ラートゲンの日本研究からも大きな刺激を受けていた。

キーワード ヴェーバー、ラートゲン、アルトホフ、ゾンバルト、ハイデルベルク大学

## I 序

## II 1896年のマックス・ヴェーバー招聘人事をめぐって

II-1～5

以上、第39号（2004年9月刊）所収

II-6・7

以上、第40号（2005年3月刊）所収

## III 国家学・官房学部門の開講科目とヴェーバー

## IV 国家学・官房学部門のスタッフ補強の試み

以上、第41号（2005年9月刊）所収

## III（補足・訂正）

## V 1900年のカール・ラートゲン招聘人事をめぐって

V-1～3（途中まで）

以上、第42号（2006年3月刊）所収

V-3（続）～7

以上、第43号（2006年9月刊）所収

## V-8 ラートゲンの着任とヴェーバー

ラートゲンは、招聘されたにもかかわらず、なかなかそれを受諾しようとせず、バーデン本省とのあいだで、招聘条件にかんする駆け引きを繰り返かえしている。任命された教授と政府とのあいだのこの種の交渉はさほど珍しいものではないが、ラートゲンの場合、前節でみたようなマールブルクにおける彼の苦境から、ほとんど意固地になって待遇の向上を図ろうとしてい

るという特殊事情がある。彼のこうした動きを察知したヴェーバーは、不審に思っ、1900年4月23日付でバーデン政府高官宛につぎの書簡を書きおくっている。あくまでもハイデルベルク大学や学生の利益を第一に考えているヴェーバーと、みずからの待遇改善に躍起になっているラートゲンとの対比が鮮やかである。

資料 V-⑧ ラートゲンの着任にかんするヴェーバーの書簡（バーデン政府高官宛、1900年4月23日付）（GLA 235/3140）

ハイデルベルク、〔19〕00年4月23日

枢密顧問官殿

仄聞するところによりますと、ラートゲン教授は、本学への招聘をまだ受諾していないとのことであり、拙下は、こうした躊躇が実利的な種類の厄介な事態を招く理由になるのではないかとつよく懸念せざるをえません。当地における拙下との会話のなかで彼が言うには、「大公国貴省は私のいまの額以上の俸給を与えようとしなさい」とのことであり、——またこれが拙下のことを顧慮して生じているということを前提としていると思われます。かかる前提条件はまちがっていると思います。というのは、——拙下の現在の状態を度外視しても——俸給の差において学問的評価の差を認めようとか、あるいは同僚の俸給の額から拙下自身の要求額を導きだそうなどとは、やはりどんな事情にあっても考えもしないことは拙下には自明だからです！

拙下はむしろ、自分の職務解除とその付帯事情全体の結果として、拙下の俸給の別様の規定が——すくなくとも拙下がその職業活動を完全に再開するまでは——適用されることをまったく当然と考えますし、——それによって、大公国貴省が私共〔＝哲学部〕の補償のために決定を下された正教授ポストの獲得が容易になるならば、実際にそうであります。

閣下にな心からのご挨拶をもちまして

敬意を込めて 真に恭順なる  
教授マックス・ヴェーバー

ここで注意すべきは、俸給に拘泥しすぎるという——新任教授にありがちな——ラートゲンの態度を批判しているヴェーバーが、たんに一般的な文脈において苦言を呈しているだけだということである。つまり、この文面から、人事過程の裏でラートゲンとアルトホフがどのような策を弄していたのか、そうした特殊事情をヴェーバーは関知していないことが明らかである。もしもヴェーバーがそうした裏事情を察知し、それによってゾンバルトが忌避されてしまったことを知っていたならば、ラートゲンにたいしてもっと激しい非難を浴びせたはずである。また着任後のラートゲンとヴェーバーとの関係は、今日われわれが知っているのとはまっ

たく異なった非常に陰悪なものになっていたにちがいない。しかしその後の経緯から、ラートゲンとアルトホフが仕組んだ裏工作は、ついに最後までヴェーバー他の同僚たちに察知されるにいたらなかったことがわかる。

ラートゲンは5月17日に正式に任命される。5月23日付で、アルンスペルガーから彼への通達が下される (GLA 235/2404)。そのなかで、「外国の国務に費やされた服務期間を算入して」給与計算がなされたことが伝えられている。1882年から1890年まで、彼は東京大学 (1886年以降は帝国大学) に勤務しており、この8年間で外国における国務 (Staatsdienst) への服務期間として算入するかしなにかによって、給与にかなりの差が出るから、待遇上は重要な事項である。この通達にたいして、ほんとうに日本における8年間の服務期間が正しく算入されたかどうか、また自分の着任日を8月に繰りあげることができないか、6月14日付書簡でラートゲンがさらに問いあわせてきており、8月25日 (彼の着任後) に、本省が最終的にこれを確認している (野崎敏郎 2005: 109-111)。

ラートゲンは、彼の希望通り8月15日に着任する。この日付はたいへん奇妙である。冬学期は10月中旬に始まるから、秋採用の場合、10月1日付着任とするのが通例であり、こんな夏季休暇中に着任するのはまったく異例である。それは、マールブルクから一日も早く退去し、またハイデルベルクの高給の恩恵を一日でも早く受けたいという彼の意向によるものであった。

彼は、着任後しばらく経った1900年11月19日付バーデン政府高官宛書簡において、表敬訪問の意向を告げており、これを受けて、この高官は、翌日付書簡 (の下書) に、自分の都合のいい日時を記している (GLA 235/2404)。これは、日本における服務期間の算入、俸給と住居手当の増額、着任日の繰り上げ——こうしたさまざまな便宜を計ってもらった礼をラートゲンが直接告げるための訪問だったのであろう。この経緯は、彼にとって、政府高官 (とくにアルンスペルガー) にたいして借りができたことをはっきりとしめしている。そしてラートゲンとアルンスペルガーとのこうした関係は——筆者の推測するところでは——3年後の1903年人事に重大な影を落とすことになる (後述)。

マールブルクで不快な思いをし、また研究・教育活動に支障を来していたラートゲンにとって、ハイデルベルクは、自尊心を満足させるために、また当座の緊急避難先として有意味であった。しかし彼は、1900年4月9日付アルトホフ宛書簡において、将来プロイセンに戻る可能性を示唆してもいた。実際、彼のハイデルベルク勤務は7年で終わり、ハンブルクへと転出することになる。一方、この件を処理したアルトホフにとって、ラートゲンをバーデンへと転出させざるをえなかったことは苦々しいかぎりであった。この頭脳流出はプロイセンにとって明らかに不利益だからである。シュモラーにとっても、ラートゲンはすでに植民政策・貿易政策のためのブレンになりつつあり、引きとめたかったことであろう。しかしマールブルクの事情がそれを阻んだのである。

ラートゲンにとって、ハイデルベルクはたしかに清新な新天地であった。しかしハイデルベルクで彼のゼミに参加していたパウル・ホーニヒスハイム<sup>(24)</sup>（1885-1963）によると、ラートゲンのハイデルベルク招聘にさいして、「何人かが、悪意をもって眉をひそめ、『彼はシュモラーの義弟だ』と意味ありげな発言をした」という（Honigsheim 1963: 224）。ハイデルベルクにもやはり反シュモラーの気風はある。ラートゲンは「シュモラーの義弟」という烙印から生涯逃れることができない。また、シュモラーやアルトホフの庇護を利用しながら世渡りをしてきた彼は、その重荷を当然背負わなくてはならないのである。

〔注〕

- (24) ホーニヒスハイムがラートゲンの「国民経済学演習」に参加したのは1905/06年冬学期のことであり（UAH/Rep. 27/1026）、またこれ以外にもラートゲンに私淑・傾倒していたことを記している（Honigsheim 1963: 224）。

## VI （幻の）ヴェーバー・ラートゲン体制と1902年の退任（降格）願

### VI-1 休暇取得とその延長（1900-1902年）

1900年秋から1903年秋までの3年間、ヴェーバーの職務上の地位は、公式には、1902/03年冬学期を除き「休暇中」であるが、この間、大学の職務から完全に退いていたわけではない。また、1900年秋以降長期休暇に入っていたのではなく、彼は、<sup>かん</sup>そのつど教壇に復帰しようところみながら、それを果たすことができず、<sup>かん</sup>そのつど休暇延長を申請している。

休暇取得とその延長にかんしてヴェーバー・大学・政府間で交わされた書類から、事実関係を確認しよう。彼はまず、休暇取得のために、ハイデルベルクの内科医オスヴァルト・フィーロルト（1856-1906）に診断書（1900年5月21日付）を書いてもらっている。その本文は以下の通りである（GLA 235/2643）。病状にかんする詳細な記述はなく、要するに休暇取得のための理由づけになればいいので、非常に簡明なものである。

国民経済学正教授・博士ヴェーバー氏は、重度かつ難治の神経衰弱症に苦しんでおり、その恢復のためには、全職務からの長期にわたる離脱が必要である。さしあたり1900/01年冬学期に休暇を申請するよう、小職は同氏に助言を与えた。

ヴェーバーは、この診断書を添付して、1900年6月6日付書簡（マリアンネ代筆）をカールスルーエ本省宛に送付し、そのなかで、「さしあたり（zunächst）1900/1901年冬学期の賜暇、および目下進行中のゼミナール業務の処理の後、7月中〔夏学期途中〕に休暇に入ることにはたいする慈悲深い許可のご意向」を求めている。またそのさい、みずからの健康状態については、「短い中断をとめないながらもいつもぶりかえしてくる病苦」と表現している（ebd.）。

これにかんして、哲学部長クルジウスから大学特別評議会にたいして、休暇を支持するよう1900年6月11日付で申し入れがなされ、6月20日付で、ヴェーバーの申請通りの休暇を、法務・文部大臣ヴィルヘルム・ノックが裁可している(UAH/PA 2408)。これで1901年春までの休暇が認められた。

しかし1900年秋になっても病状は芳しくなかったため、ヴェーバー(在ウラッハ)は、11月16日付で哲学部宛に書簡を送り、現在の休暇を1901年夏学期まで延長するよう申請し(ebd.)、17日付で本省宛にも同内容の休暇延長願を送付している(GLA 235/2643)。哲学部は前者を18日付で特別評議会に回し、ノックは後者を容れて12月24日付で裁可している(UAH/PA 2408)。これで1901年秋までの休暇が認められた。

このときヴェーバーは、後者にフィーロルトの新しい診断書(1900年11月14日付)を添付している。その本文は以下の通りである(GLA 235/2643)。文面からわかるように、ウラッハ滞在中のヴェーバーからの依頼で診断書を書いたフィーロルトは、このとき直接問診してはいない。

目下治療に当たっているウラッハのクリュップフェル博士の診断書における教授マックス・ヴェーバー氏の体調にかんする医療報告が小職の手許にあり、これにもとづき、また小職が個人的にえた病苦所見にももとづき、以下のように証明する。

患者の側から、つまり従前の病状経過の点から、来年の復活祭において<sup>(1)</sup>、講義活動への復帰はなお可能でないと見込まれる。

さらにヴェーバー(在ローマ)は、1901年6月4日付(本省宛)および5日付(哲学部宛)で休暇延長願を提出する。前者において、彼は、休暇延長はこれが「最後」(強調原文)であると述べ、保養にもかかわらず活動能力はひどく不安定に揺れている事情をしめし、1902年復活祭までの休暇延長を求めている。そのうえでつぎのように書いている。「もしも願望に反して、復活祭になっても活動能力が完全でなければ、そのときには小職のかつての退任願をふたたび取りあげるでしょう」(ebd.)。彼は、自分自身の経過観察を1902年春までと期限を切り、このときまでに十分恢復しなければ退任したい意向を、あらかじめ本省にたいして明示したのである。また彼は、再度フィーロルトに診断書を依頼し、それは6月8日付で(おそらく本省に)提出されている。その本文は以下の通りである(ebd.)。この診断書作成にさいしても、フィーロルトはヴェーバーに直接会ってはいない。

教授・博士 M・ヴェーバー氏から、ローマより、同氏の健康状態にかんして小職に寄せられた通知から推測すると、重度かつ難治の神経衰弱症はたしかに弱まっているが、なお完全には消えていない。かかる状況下において、小職は、患者に、1901/2年冬学期の

職務に復帰するよう責任をもって勧告しえず、むしろ小職の観点からは、1902 年復活祭までの同氏の休暇願を支持すべきだと考える。この新しい休暇の終了後に、教授ヴェーバー氏がその大学の職務にふたたび取りかかりうることはありうる<sup>(2)</sup>と思われる。

これを受けて、哲学部は 6 月 13 日付で大学特別評議会に上申し（UAH/PA 2408）、この休暇延長願は 6 月 20 日の特別評議会において承認されている（UAH/RA 824, S. 239）。一方政府側は、ノックとアルンスペルガーによる協議（6 月 30 日付省内文書）を経て、7 月 16 日付で「1902 年夏学期開始まで」の休暇延長を承認し、参事官フランツ・ベームはそれを 7 月 24 日付で大学特別評議会に伝えている（GLA 235/2643）。こうして 1902 年復活祭まで休暇が延長された。そして後述するように、その復活祭の頃にヴェーバーはあらためて大きな決断を下すことになる。

以上のように、ヴェーバーは、次学期末を期限とした短い休暇を申請し、またそれをそのつど延長してきた。それは、彼が、つねにつぎの学期にはなんとかして授業（とくに講義）を遂行しようと取りくみつづけていたからである。ところが、この時期の休暇が短期休暇の延長・再延長であることは、奇妙なことに、一般にほとんど知られておらず、彼があたかも長期休暇を取得して大学から（またハイデルベルクから）離れていたかのように誤解されていることが多い。またこの時期に、彼が早期における講義再開のために全力を傾注しつづけていたという事実も——これまた奇妙なことに——ほとんど知られていない。実際には、彼は開講予告を繰り返しかえしているのだが。

## VI-2 1902 年の退任（降格）願とその付帯書簡

ヴェーバーは、1901 年秋以降に、滞在先のローマでいくらか恢復し、そこで、つぎの「夏学期のために、講義 1 科目とゼミナールの予告をすることを望んだ」とマリアンネは書いている（LB 1: 265, LB 2: 288）。この記述は、1902 年夏学期の開講予告科目一覧に「農業政策」（講義科目）と「上達した学生のための大がかりな学術論文への手引」（演習科目）とが記載されていることと完全に一致する（AdV）。また彼女はさらにつぎのように記している<sup>(3)</sup>（LB 1: 265-266）。

——そして今さらに予期しないことが生じました。マックスは、夏学期（1902 年）に農業政策とゼミナールの二時間をさしあたり自分のために予告するよう、数日前に書簡でラートゲンに依頼しました。良識をもち、けっして軽率に行動せず、彼の後任の招聘<sup>(4)</sup>にさいして助言を与えられるようにしておくために、彼は 3 月になってようやく別れを告げようとしています。彼にとって、いまいちど休暇を申請することはまったくありえないことです。「いったい君は何を考えたのか」という彼の問いに、私は「何も。だって私はあなたの

健康状態はわかりませんから。でもこのところ、いつかまた仕事ができるようになるだろうという希望が出てきました」と答えました。この頃私たちは R. [ラートゲン] と Sch. [シェーファーか?] に宛てて二通の長い書簡<sup>(5)</sup>を書きました。で、このように決定はまたもや延期されたのです。それで、あれこれの望みを籠のなかに入れておくのはどうもむずかしく、またいつも処置が先送りになってしまうので、私はときおり同情したくなります。——でも、もしも私〔マリアンネ〕が正教授職に固執するとしたらそれは愚かなことだと、また——もしもマックスが元気になれば——ほかのことはなにかもどうでもよくなるかもしれないと、私は毎日自分に言いきかせるでしょう。——

この記述からは、恢復しつつあるヴェーバーの姿を窺うことができる。また 1902 年 3 月(復活祭の頃)に、次学期における教壇復帰に向けて意欲を高めていることもわかる。ところがまさにこの頃、「彼は、予告された講義をおこなう力がないような気がした」(LB 1: 268, LB 2: 291)。つまり、開講予告をした直後、またしても講義ができないと感じたのである。こうして、彼自身が「最後」とみなした休暇延長期限ギリギリになって、彼は決断を迫られることになる。そこで意を決して、彼は滞在先のフィレンツェから退任(降格)願を提出する。彼が退任(降格)願を提出するのは二回目である。マリアンネは、これを口述筆記しながら泣けてきて恥ずかしかったと記している(LB 1: 268-269, LB 2: 291-292)。

マリアンネが涙を浮かべながら代筆した退任(降格)願とは、つぎに訳出する 1902 年 3 月 26 日付書簡のことである。伝記にあるとおり、この書簡の本文はマリアンネが代筆しており(宛名・署名等はヴェーバーの筆跡)、発信地はたしかにフィレンツェである。以下にこれを検討するが、ここでひとつわれわれが留意すべきは、彼が、正教授からの退任の意向をしめしているのと同時に、現に自分が正教授であるかぎり、また正教授退任後も、授業を遂行しようと執念を燃やしていることである。

資料 VI-① ヴェーバーの退任(降格)願②(バーデン政府宛, 1902 年 3 月 26 日付)(GLA 235/2643)

目下フィレンツェ滞在中、ヴィア・マザッチオ 105

1902 年 3 月 26 日

大公国法務・文部省御中

陛下におかれましては、拙下の現在の職からの解任、およびハイデルベルク大学教授団の員外構成員への拙下の異動を実現するご意向であることをお願い申し上げます。

拙下は、かつて差しあげました同様の退任願との関連で、つぎのように付加したく存じま

す。

拙下の健康状態のきわめて顕著な恢復にもかかわらず、当分の間なお、拙下の労働能力の度重なる中断とともに、拙下の職に付随する教育義務を、間近に迫った学期〔1902年夏学期〕にはまったく果たしえず、またそのつぎの学期〔1902/03年冬学期〕にも限定された形でしか果たしえないことを見込まなくてはならず、——またさらに、学問的生産と教育活動とを、正教授職の保持者によってそれが期待されるにちがいないほどに統一させることは、拙下には長期にわたって不可能なことだと思われまふ。かかる事態のもとで、現在の状態を継続させることは、拙下の個人的な感情にも反し、またこのこと〔現在の状態の継続〕によって、いまなお拙下が占めている教授の地位にかんする別様の処分が妨げられてしまうであろう本学の利害にも反します。——本学における拙下個人の地位にかんしては、本学の教授団にひきつづき所属したく存じます。

拙下は、心身能力が増進するという条件のもとで、とりわけゼミ指導教官として教育活動を遂行する所存であり、ますます、また公的拘束なしに拙下が国務遂行可能になることは疑いを容れませぬ。それゆえ、本学の教授団にとどまりうるといふ拙下の希望に、懸念が持ちあがることはないでしょう。

敬意を込めて

教授・博士マックス・ヴェーバー

「かつて差しあげました同様の退任願」とは、すでに本稿中に訳出した1900年1月7日付書簡（以下「退任（降格）願①」と称する）のことである（本誌第42号44-45頁資料V-②）。今回の書簡（以下「退任（降格）願②」と称する）は、退任（降格）願①の内容を前提とし、それを再度確認しつつ、そこにいくつかの内容を付加する（*hinzufügen*）という位置づけを与えられている。

実際、二つの退任（降格）願は、呼応しあうように整合性が保たれている。退任（降格）願①においては、正教授休職によって大学が不利益を被っていること、自分のように若い官吏が分不相応な厚遇を受けるのは不適切であること、自分のポストの後任を選ぶべきこと、その後任の着任まで自分がゼミナール指導をおこなうことは可能であること、退任後は私講師として勤務したいこと等が主張されていた。退任（降格）願②においても、ここにみるように、大学の不利益、不適切な厚遇はヴェーバー自身の個人的感情に反すること、ゼミナール指導への意欲、退任後もひきつづきハイデルベルク大学で教鞭を執りたいことが繰り返されている。とくに重要なのは、1900年においても1902年においても、ヴェーバーが一貫して、正教授退任後もこの大学にとどまって教育活動をつづけたいという強い意思表明をしていることである。すでに本稿中で強調しておいたように、彼は「退職」を望んでいるのではなく、あくまでも正教授職を他の人に譲り、自分はひきつづき正嘱託教授等の身分においてこの大学に勤務し



つづけようとしているのである。

一方、退任(降格)願②で新たに付加された内容は、学問的生産と教育活動とを、正教授にふさわしい程度に統一させることは長期にわたって不可能だとした箇所である。1900年にはなかったこの件が<sup>くだり</sup>1902年3月に現れたのは、当時のヴェーバーの心身の状態および休暇中の活動状況とかかわりがある。彼は、妻とともに、1901年3月から1902年3月まで、ローマ他数カ所を巡っており、このとき、当時ローマにあったプロイセン歴史研究所で、カール・シエルハス、ヨハネス・ハラール<sup>(6)</sup>との議論に熱中し、『コンラート年報』とジンメル『貨幣の哲学』を読んでいる(LB1: 266, LB2: 288)。またほかにもこの時期にさまざまな知的刺激を受けた模様で、ヴェーバーは、教壇への復帰とともに、研究活動への本格的な復帰をも企てている。そしてそれはまもなく『ロッシヤーとクニース』を皮切りとする数々の著作となって結実することになる。これにたいして、教壇への復帰は彼の希望通りにならず、われわれがよく知っているように、じつに1918年夏学期のヴィーン大学講義にいたるまでヴェーバーの教壇復帰は果たされず、しかもハイデルベルク大学においては、ついに復帰は果たされないのである。

このことを勘案すると、彼は、この(1902年3月という)時期において、教壇復帰と研究復帰とを二正面追求しながら、前者が思うようにすすまないことに悩み、学問的生産と教育活動との統一をな<sup>か</sup>ば諦め、当面、特定の時間(時間帯)に拘束されることのない自由な研究活動に重点を置きつつ、きわめて限定された範囲内で教育活動の再開をも企てるという方向へと軌道修正し<sup>つ</sup>つあ<sup>つ</sup>たものと判断できる。そのことは、退任(降格)願②と同日付でバーデン政府に送付されたつぎの書簡からも確認できる。

資料 VI-② 講義免除にかんするヴェーバーの書簡(バーデン政府宛, 1902年3月26日付)  
(GLA 235/2643)

目下フィレンツェ滞在中、ヴィア・マザッチオ 105

1902年3月26日

大公国法務・文部省御中

本状とともにお手許にあります退任願の根拠づけとの関連で、謹んで以下のようにお願い申し上げます。

<sup>きた</sup>来る夏学期において拙下の予告した以下の講義：

1. 農業政策
2. セミナール演習

の任を解かれますよう。

前記の退任願において詳述いたしましたように、来る学期に持続的な教育活動の可能性を見込むことはできかねます。農業政策の領域は、キンダーマン氏の予告した講義に含まれておりますので、見込まれていた講義の廃止によって、教育計画の欠落は生じません。一方、国民経済学演習のためには、ラートゲン氏によって学問的演習が予告されており、そのうえなお二名によって演習授業が予告されております。

かかる事情のもとでは、高い確率で、予告した講義を完遂させようとする無益な試みをせず、むしろ、〔これまでの〕長期にわたる外国への転地によって部分的には完全に遮られ、部分的には非常に困難になった学問活動（*wissenschaftliche Tätigkeit*）を再開することが、拙下には理に適っていると思われます。

敬意を込めて

教授・博士マックス・ヴェーバー

この書簡の後半部にしめされているように、講義完遂の試みは無益とする一方で、ヴェーバーは、外国を転々とすることによって非常に困難になってしまった研究活動を本格的に再開する（*wiederaufnehmen*）ことが、いまは理に適っていると判断している。したがって、この1902年3月の時点において、彼は、研究活動への復帰を最重要課題と設定し、しかも正教授から員外身分への降格を懇願し、可能な範囲で教壇への復帰もひきつづき追求するというスタンスを固めつつあったのである。そのことは、一方では、1902年以降における彼の旺盛な著述活動に鮮やかにしめされており、またもう一方では、この書簡によって1902年夏学期の講義・演習を放棄したものの、つづく1902/03年冬学期にも、また1903年夏学期にも、くりかえし講義と演習の開講を予告し、とくに1902/03年冬学期の演習を敢行しようとしたことにしめされている（後述）。

資料 VI-①②の二通の書簡は、書かれてから一週間ほどヴェーバーの手許に置かれたままだった。その間、彼はこの二通の書簡の内容を冷静に再検討した後、つぎに訳出するアルンスベルガー宛書簡<sup>(7)</sup>とともに（つまり三通の書簡をひとまとめにして）カールスルーエに宛てて発送している。

資料 VI-③ 退任（降格）にかんするヴェーバーの書簡③（アルンスベルガー宛，1902年4月3日付）（GLA 235/2643）

目下フィレンツェ滞在中，〔1902年〕<sup>(8)</sup>4月3日

ヴィア・マザッチオ 105

枢密顧問官閣下

拙下は、同便にて大公国貴省に新たに退任願を提示いたしましたので、なんといっても困難な状況下にあつて拙下が受けた特別な厚遇にたいしまして、衷心より鄭重なる感謝の念を表しないわけにはいきません。——今回、拙下が退任願に固執せざるをえないと考えますのは、なによりもまず、これにかんして、近日中に再度〔職務が〕中断される可能性なしに、拙下の職務の全面的な再開が見込まれうる特定の時点が、明確に医学的見地から保証されえないという認識に立つからであります。拙下が、ちょうど始まっている学期〔1902年夏学期〕にまず講義を完遂できないであろうことは明らかであります。とくに、拙下にとりまして、さしあたりこれ〔講義の完遂〕よりは外国にいるほうが可能であり、この間<sup>かん</sup>いちじるしく増大している専門文献にかんして、最新のものにいたるまで揃えなくてはなりませんから。

しかしさらに、つぎの冬学期〔1902/03年冬学期〕に、拙下が正教授として遂行しなくてはならない基幹講義を開講できるか否かは不確定です。かかる状況下では、たとえば場合によっては大公国貴省が休暇更新願に好意的であろうと、そうした願を正当化すべきではないと思われまふ。

いま、拙下の提案におきまして、拙下を大学組織から完全に隔離することのないように、むしろ大学の正嘱託教授（*Titularprofessoren*）の一員として採用するようお願い申し上げます。無理に大声を張りあげ、厳格に時間に拘束された講義は、基本的に、拙下が持続的に遂行できないことですから、拙下は基本的に、さしあたり自由な〔時間の〕配分が可能なゼミナール指導に専念するつもりです。ゼミナール運営への〔拙下の〕共同参画にたいしては、学部とラートゲン氏がきつと助力をしてくれるでしょうから、それによって、拙下の個人的関心は十分に充足されるでしょうし、とくに拙下は、拙下のポストへの再補任〔ヴェーバーの後任人事〕の問題が、たんに授業の実際的利害におうじてのみ処理されることを望みます。もしも、カールスルーエ〔本省〕の意向で、なんらかの理由で協議が望ましいのであれば、拙下は、まず約14日のうちにはハイデルベルクの拙宅に帰ることができ、またそれからいつでも個人的協議のために待機します。

大臣閣下〔ヴィルヘルム・ノック国务大臣兼法務・文部大臣〕にも、かかる事態においてたえず賜りました多大なるご厚情にたいしまして、拙下からの忠実で敬意を込めた感謝の意をお伝えくださるよう、閣下をお願い申し上げつつ、

閣下に心からのご挨拶をもちまして

敬意を込めて 真に恭順なる

教授・博士マックス・ヴェーバー

自身を正嘱託教授に加えてほしいという要望の狙いについて、マリアンネは、これによって本省からヴェーバーへの年金給付を免ずることができるからとしている（LB 1： 268, LB 2：

291)。退任した正教授は当然年金給付の対象となるが、筆者がヴェーバーの年金予定額とヴィルヘルム・ブラウネ（1850–1926）の年金額を調べたところ、その額はなんと正教授在任時の年俸と同額であり、しかもそれは物価上昇におうじて引きあげられていたことが判明した<sup>(9)</sup>。これは、正教授が享受する待遇がいかに手厚かったかをしめす一例だが、ヴェーバーは、こうした分不相応な厚遇を受けることを嫌っており、そのことも正嘱託教授への異動を希望する理由になっている<sup>(10)</sup>。

ヴェーバーは、これまで、授業——とくに講義——をすることが可能か否かについて、何回も逡巡・決意・翻意を繰り返してきた。したがって、ここではそうした失敗の経緯を踏まえて慎重な態度をとり、フィーロルトの所見等を勘案して、1902年夏学期はもとより、1902/03年冬学期において講義遂行が可能か否かも不確定だとしている。大声を張りあげる必要があり、また特定の時間に拘束された講義活動には耐えられないからである。そのうえで、正教授からの退任と正嘱託教授への任用を求め、当面、講義活動は避けてゼミナール指導に限定して教育活動を展開することを企てている。彼は、母親に宛てた1902年4月14日付書簡のなかでも、同様に、大講義をなしうる見込みがなく、声を張りあげて話すことができないと訴えている（LB 1：270, LB 2：293）。

この母宛書簡中で、ヴェーバーは、これから三週間ほどかけてボローニャ、ミラノ、ルガーノを回るつもりだと書いている。ところが、彼は、一週間後の4月21日（彼の38回目の誕生日）にはもうハイデルベルクに舞いもどっている<sup>(11)</sup>（ebd.）。つまり彼は明らかに転地療養の予定を切りあげている。なぜ切りあげたのかというと、資料VI-③の書簡中に記されているように、本省の意向で、なんらかの協議がなされることになり、そのため急いでハイデルベルクに戻ったからであろう。これを時系列順に整理すると、彼は、4月3日以降に三通の書簡を発送し、その時点で約二週間後（つまり4月17日頃）までにはハイデルベルクに戻ることができるよう用意をしていた。その後4月14日になってもまだカールスルーエ本省からの返答が来ないので、彼は三週間ほどかけてイタリア各地を回ろうと考えた。しかしその直後に本省からの通知が来て、本省との協議をすることになったため、急遽4月21日に帰宅したことになる。

この「協議」そのものの記録はないが、「協議」の前後と思われる時期に、ディートリヒ・シェーファーがヴェーバーを訪問して、バーデン政府が退任願の撤回を求めている旨を伝えているから（LB 1：271, LB 2：293–294）、正教授退任というヴェーバーの希望を本省は認めようとしなかったことがわかる。

一方、休暇延長にかんして、哲学部は、1902年4月17日付で大学特別評議会に宛ててヴェーバーの休暇延長を申請し（UAH/PA 2408）、特別評議会は、これを4月30日付で本省に宛てて申請している（GLA 235/2643）。本省はこれを5月21日付で裁可し、休暇は1902/03年冬学期開始時まで延長されることになった（UAH/PA 2408）。こうして1902年秋まで休暇

は延長されたが、正教授から退任するか否かという大きな問題の処理は、またしても先延ばしにされたのである。

### VI-3 ヴェーバーによる開講の試みとその挫折

国家学・官房学部門における1900/01年冬学期までの開講予告状況ははすでにしめしているが(本稿(3):33), ヴェーバーとラートゲンの科目担当状況を明示するために, 1899/1900年冬学期から1903年夏学期までの開講予告科目のうち, 二人の担当予定分を抜きだしてみたのが表VI-1である。これをみながら, 開講状況についてまとめて検討しよう。

ここにみられるように, ヴェーバーに割りあてられていた「理論的国民経済学」とゼミナール演習<sup>(12)</sup>を, ラートゲンはその着任直後から肩代わりし, その後1901/02年冬学期まで, ラートゲンが国民経済学・財政学正教授としての任を一手に引きうけている。しかし, その後三学期(1902年夏学期・1902/03年冬学期・1903年夏学期)にわたって, ヴェーバーは, 「農

表 VI-1 ヴェーバーとラートゲンの担当科目 (1899-1903 年)

年・学期	ヴェーバーの開講予告科目	ラートゲンの開講予告科目
1899/1900 年 冬学期	農業政策	(未着任)
	ゼミナール演習	
1900 年 夏学期	理論的国民経済学〔開講されず〕	(未着任)
	大がかりな学術論文への手引〔開講されず〕	
1900/01 年 冬学期	(開講予告なし)	理論的国民経済学
		大規模産業と労働問題
		国民経済学演習
1901 年 夏学期	(開講予告なし)	理論的国民経済学
		財政学
		国民経済学演習
1901/02 年 冬学期	(開講予告なし)	実践的国民経済学
		大規模産業と労働問題
		国民経済学演習
1902 年 夏学期	農業政策〔開講されず〕	理論的国民経済学
	上達した学生のための大がかりな学術論文への手引 (受講料免除)〔開講されず〕	財政学
		国民経済学演習 (受講料免除)
1902/03 年 冬学期	国民経済学演習 (経済史と農業政策) (木曜 6-8 時, 受講料免除)〔1902 年末までに中止と推定〕	実践的国民経済学
		大規模産業と労働問題
		国民経済学演習 (水曜 6-8 時, 受講料免除)
1903 年 夏学期	農業政策〔開講されず〕	理論的国民経済学
	上達した学生のための大がかりな学術論文への手引 (受講料免除)〔開講されず〕	財政学
		国民経済学演習 (水曜 6-8 時, 受講料免除)

出典: Adv.

業政策」講義を2回、演習を3回開講予告している。この開講予告については、なぜかこれまでヴェーバー研究者のあいだでも知られていなかったようである。

演習にかんしては、ヴェーバーもラートゲンも開くことになっており、それぞれ曜日設定が異なっているから、合同演習ではなく別々に開講される予定だったことがわかる<sup>(13)</sup>。ここから明らかなように、このときヴェーバーは正教授二人体制の実質をしめすつもりだったのである。

ヴェーバーが開講しようとした講義・演習の内容は、主として農業政策と経済史に係わるものである。講義としては、「理論的国民経済学」や「実践的国民経済学」のように、週四～五日（各一時間）出講しなくてはならないハードな基幹科目を避け、それはラートゲンらに任せ、自分は週二日（各一時間）の「農業政策」<sup>(14)</sup>に限定して講義活動に復帰しようとしている。また演習のうち、1902年夏学期・1903年夏学期に予定されていた演習は、上級学生のための論文指導であるから、指導内容は各学生自身が希望する研究テーマに即したものであり、したがってヴェーバー自身が演習の内容を限定してはいなかったと推断される。これにたいして、1902/03年冬学期の演習は、その内容を「経済史と農業政策」とすることが開講予告科目一覧に明示されている（AdV）。このことから、予定されていた夏学期の演習は上級学生の自由研究にもとづく討論（Verhandlung）で、冬学期の演習は彼自身が指定したテーマにかんする討議（狭義の Übung）だったことがわかる。

開講予告された三学期のうち、1902年夏学期・1903年夏学期にかんしては、ヴェーバー自身によって休暇および開講中止の申請がなされ、それが認められている。したがって、この二つの学期に彼は公式にはどの科目も開講しておらず、当然大学会計掛の記録もない。これにたいして、1902/03年冬学期にかんしては、休暇の申請・上申・認可の記録がみあたらず、またこの学期の「国民経済学演習（経済史と農業政策）」にかんしても開講中止の記録がみあたらない。しかも、大学会計掛によって、この科目の受講料納付記録用紙が作成されている（UAH/Rep. 27/1409）。この用紙に学生が受講料を支払ったという記載はないのだが、もともとこの科目は受講料免除とされているので、記載がないから開講されなかったと短絡することはできない<sup>(15)</sup>。それどころか、1902年10月21日付本省文書をみると、参事官ベームは、ヴェーバーからの申請（同月16日付）におうじて、ヴェーバーを含む国民経済学ゼミナール担当者たちにたいして、ゼミナール運営費として、同月15日（1902/03年冬学期開講時）にさかのぼって、三カ月ごとに900マルクを支払うことを認可している（GLA 235/2643）。また資料VI-③の書簡中で、ヴェーバーは「ゼミナール運営への共同参画」の意思表明をしていた。このことから、ヴェーバー自身もこの学期になんらかのゼミ活動を公式におこなったとみるべきである。ところが、学期途中の1903年1月から3月にかけて、彼はイタリア（ネルヴィとローマ）に滞在している（LB 1: 274-275, LB 2: 298）。どうやらまたしても無理がたたり、演習を途中で放棄せざるをえなくなった模様である。

これまでのヴェーバー研究にあつては、この時期、農業政策・経済史関連の講義や演習に強い意欲をしめす彼の姿は見過ごされてきた。そして、なにか教職・公務から切りはなされたなかで、社会科学方法論にかんする論文執筆にのみ全精力を注いでいたかのようなヴェーバー像が描かれることが多かった。ところが実際には、彼は病身に鞭打つようにして教壇への復帰方法と復帰時期——それもできるかぎり早い時期——を模索しつづけ、またその復帰にさいしてはとりわけ農業政策と経済史の問題に取りくもうとしていた。だが残念ながらこの時期に、彼は、私的な学生指導をした以外、公式記録上はひとつも授業を完遂することができず、1902/03年冬学期の演習も途中で挫折した。国家学・官房学部門のヴェーバー・ラートゲン二人教授体制は、ついに幻のまま終わったのである。

#### VI-4 休暇中のヴェーバーの動静について

発病後、ヴェーバーは転地療養を繰り返しており、同行したマリアンネは、そうした旅行についてくわしく記している。そのため、これを読んだ者は、なにかヴェーバーが発病後の大半の時期をハイデルベルクから離れて過ごし、当然大学の職務からも離れていたかのような印象を抱くことになった。しかし、彼女が記している旅程をチェックすると、そのような印象が正しくないことがわかる。

マリアンネによる伝記中には、時期にかんしてひどく曖昧な記述が多いが、確認できるかぎり、1898年の発病から1903年秋の正教授退任までのあいだ、彼が学期期間中にハイデルベルクから離れているのは、1898年夏学期の終わり(1898年7月25日以降)、1898/99年冬学期の初め(1898年10月)、1900/01年冬学期、1901/02年冬学期、1902/03年冬学期、1903年夏学期である。これにたいして、1900年夏学期、1901年夏学期、1902年夏学期は、おおむねハイデルベルクにとどまっている模様である。夏はスイス等、秋から冬にかけては南方の暖かい地方に滞在し、春から夏にかけて(おおむね夏学期中)はハイデルベルクにとどまる傾向も認められる。

旅行もせず、とくにこれといってなにも変わったことのない日常の日々は、記録にも記憶にも残りにくいものである。だからマリアンネの記述がない時期には、ヴェーバーがハイデルベルクにいる可能性が高い。いずれ、この時期の彼の書簡が『全集』にまとめられることになるので、各書簡の日付と発信地とをチェックすれば、彼がいつ(またどのような動機で)ハイデルベルクへと戻ってきているかがある程度まで判明するだろう。したがってここではこれ以上の詮索をしないことにするが、筆者の手許にある文献・資料から推測できるかぎりでは、各学期(とくに夏学期)が始まる直前に、開講が可能かどうか慎重に考慮し、ハイデルベルクまたはその近くに移動するのが彼の行動パターンである。しかし開講をあきらめると、彼はまた転地療養の旅に出るか、あるいはハイデルベルクにとどまって学生指導をおこなうのである。夏学期にハイデルベルクにいるということは、開講予告されていた夏学期演習の内容(上級学生

のための論文指導）を、公式の演習授業としてではなく、自宅で随時おこなう学生指導に振りかえて遂行したことを意味する。これにたいして冬学期においては、気候の問題から彼の健康上の負担が大きく、転地療養を余儀なくされており、したがって学生指導も思うようにできなかったことであろう。

みてきたように、この時期、彼は、教壇に復帰しようと試みつつけている。たしかに彼は転地療養にも努めているが、つぎの学期が近づくと、自分の心身の状態を精細に分析したうえで<sup>(16)</sup>、全力を挙げて開講可能性を追求し、また健康の許すかぎり、随時学生指導に当たっているのである<sup>(17)</sup>。

#### VI-5 ハイデルベルクにおけるヴェーバーとラートゲン

ラートゲンは、ハイデルベルク着任後、いわゆるヴェーバー・クライスに加わる。また彼の妻エミリーは、マリアンネ・ヴェーバーとたいへん親しかったそうである<sup>(18)</sup>。

ヴェーバーによるラートゲン評としては、パウル・ホーニヒスハイムの回想録が重要である。あるとき、ホーニヒスハイムが、ヴェーバー夫妻の前でラートゲンに言及したところ、ヴェーバーは、ラートゲンが「その几帳面さとけっして羽目を外さないその流儀とによって、結局は人の神経を苦しめる」と評したそうである（Honigsheim 1963: 224）。この「羽目を外さない」という評言は、ラートゲンのスタンスをよく言いあてている。それは彼の気質であるとともに、シュモラーの義弟である彼は、つねにこの義兄を意識しながら自分の立ち居振る舞いを決することになるから、そのためなおさら慎重居士たらざるをえなかった。そうした態度は、ヴェーバーにとって、ラートゲンへの不満の種となっていたのである。

ラートゲンは、もともとヴェーバーが正教授としての職務を遂行できなくなったことを受けて招聘されたので、ヴェーバーがおこなはずであった職務を代行している。たとえば、ヴェーバーの愛弟子であったエルゼ・リヒトホーフエンが学位を取得しようとしたときには、ラートゲンが彼女の学位請求論文の審査に当たっており、彼は、1901年7月12日付の講評において、ヴェーバーの立論を敷衍した彼女の論文にたいして、おおむね好意的な評価を下している<sup>(19)</sup>（UAH/IV/102/131）。

ラートゲンがハイデルベルクに勤務していた時期には、日露戦争（1904-05）を契機として、ドイツ人のあいだで日本にたいする関心が増大しており、それにおうじて、ラートゲンは日本関連の著作を集中的に著している（野崎敏郎 2005: 252-253）。とりわけ、1906年夏学期に彼がハイデルベルク大学でおこなった「日本人の文化」という公開講義は、翌年まとめなおされ、『日本人の国家と文化』として公刊され（Rathgen 1907）、それはヴェーバーにとって、日本にかんするもっとも重要な情報源となった。なかでも『ヒンドウ教と仏教』における日本関連の叙述には、ラートゲンのこの著作からの影響が顕著に認められる。これについてはすでに詳細に分析した（野崎前掲書: 261-378）。既述のように、1902年春頃から、ヴェー



ーバーは自由な研究活動に重点を置くようになっており、その新しい活動の局面において、新しく加わった同僚の研究成果をも貪欲に吸収しつつあったのである。

ラートゲンがハイデルベルク大学に着任してからハンプルク拓殖研究学院に転出する<sup>(20)</sup>まで、つまり1900年から1907年までのヴェーバーとラートゲンとの関係については、拙著中に記しておいた(前掲書:250-256)。二人の関係にかんしては、ほかにも語るべきことがあるが、紙幅の関係で割愛する<sup>(21)</sup>。

(第VI章完)

〔注〕

- (1) 「来年〔1901年〕の復活祭において(zu Ostern kommenden Jahres)」復帰が可能でないというのはいくらか曖昧な表現だが、1901年春までの休暇はすでに取得済みであり、この診断書は1901年夏学期の休暇取得のためのものだから、く1901年の復活祭を過ぎて夏学期が始まっても復帰はできそうにない」という含意になる。
- (2) 「取りかかりうる(aufnehmen können)」と「ありうる(möglich)」との可能表現が重複している。
- (3) これはマリアンネが当時書簡中に記していた記述であるが、彼女による伝記の第二版ではこの箇所が削除されており、したがって邦訳されていなかった。大久保和郎による邦訳では、201頁下段の「感謝だけしか感じません」の後に続く記述である。
- (4) この人事は1903年になって実現し、採用されたゴートハインは翌1904年夏学期から勤務することになる。
- (5) この二通の書簡の所在は今のところ確認できていない。現存するとすれば、ハイデルベルク大学哲学部文書ファイルのなかに入っている可能性がある。ラートゲン宛の書簡がラートゲン遺稿集に入れられたとすれば、その後鞆晦した可能性が高い(後注<sup>(2)</sup>参照)。
- (6) マリアンネによる伝記の索引では、この人物が「エルンスト・ハラー」とされているが(LB2:768)、これは別人であり、ローマでヴェーバーの議論の相手をしたのは、ローマ教皇の研究で知られるヨハネス・ハラーである。この件については今野元の注記を参照(亀嶋庸一編 2005:185-186)。
- (7) これは、マリアンネが代筆した5頁からなる書簡である。6頁目(第5頁の裏)には、別人(法務・文部省勤務員)によって書きつけられたメモがあり、そこには、「この書簡は、担当官・枢密顧問官・博士アルンスベルガー氏より前月〔1902年5月〕25日に送付された」と記されている。ここから、この書簡はもともとアルンスベルガー宛であったことが明らかである。なお、これまで本稿中で紹介してきた「バーデン政府高官宛」の書簡も、その大半はアルンスベルガー宛だと思われる。
- (8) この書簡には年号表記が欠けているが、前注に記した書簡裏のメモ中に「1902年6月13日」と記されている。この日付は、アルンスベルガーから本省に回されたこの書簡の内容にかんする裁可が下された翌日の日付である。
- (9) ヴェーバーの身上書(Standes-Liste)中の俸給表(GLA 235/2643)、および大学特別評議会の1903年8月14日付決定(UAH/PA 2408)によると、予定されていた年金額は、彼の年俸(勤続年数が短かったため、1897年の着任以降昇給はなかった)と同額であり、しかも住居手当は物価におうじて引きあげられる手筈になっていた。また、ブラウネの身上書に記された年金額も、1919年に退任する時点の年俸(彼の31年間の在職中、昇給によって引きあげられてきた年俸の最高額)と同額である(GLA 235/1830)。筆者が比較の対象としてブラウネを選んだのは、ヴェーバーと同

時期に在職し、またヴェーバーと同様退任後に正嘱託教授になっているからである。

- (10) 政府側に保管されていたヴェーバーの身上書の俸給表の末尾には „Auf Ruhegehalt verzichtet“ と記されているから（GLA 235/2643）、1903年に退任するとき、彼は実際に年金を謝絶したことがわかる。なお、同様の身上書は大学側にも保管されているが、こちらには年金放棄の記載が欠けている（UAH/PA 2408）。
- (11) 安藤英治は、ヴェーバーがイタリアからハイデルベルクに帰ってきた日を1902年4月8日としている（安藤英治 1979/2003：123）。これは、ハイデルベルクの戸籍簿に記載されている住民登録の開始日がこの日だからである（安藤英治 1972：133）。だが、マリアンネは、帰ってきたのがヴェーバーの38回目の誕生日（4月21日）だったとはっきり述べているのだし、4月8日に帰ってきたとすると、4月14日付母宛書簡がフィレンツェから出されていることを説明できない。したがって筆者は安藤説を採らない。

戸籍簿の記載開始日が4月8日であることは、実際にその日から住みはじめたことを意味せず、またその日にヴェーバー夫妻が住所の届け出をしたことをも意味しない。届け出は後日だったが、なんらかの理由で書類上はさかのぼって記載されたのか、あるいはマリアンネだけが先に帰ってきていたのか、どちらかであろう。
- (12) 表VI-1には記載していないが、ヴェーバーとラートゲンのほか、レーザー（1902年夏学期、1902/03年冬学期）とキンダーマン（1902年夏学期、1903年夏学期）もそれぞれ演習を開講予告しており、イエリネクも哲学部・法学部共同の「公法学演習」を継続開講しているから、この時期に国家学・官房学部門では4～5の演習が開講予告されていた（Adv）。

またヴェーバーは、演習の内容や開講対象とする学生をある程度まで事前に開示し、開講対象にかんして、夏学期は上級学生向けに限定し、冬学期はその限定を外している。1900年以降夏学期にかぎって三回開講予告される「大がかりな学術論文への手引」は上級学生向けの論文指導である。これにたいして、ラートゲンは——開講予告科目一覧における記載にかんするかぎり——「国民経済学演習」という名称で通しているので、その内容や開講対象の異同は判然としない。
- (13) 1904年にヴェーバーの後任としてエーベルハルト・ゴートハインが着任すると、ラートゲンはゴートハインとの合同演習を開始する。1907年にラートゲンがハンプルクへと転出し、その後任としてアルフレート・ヴェーバーが着任すると、今度はゴートハインとA・ヴェーバーとの合同演習になる。
- (14) 開講予告によると、「農業政策」は、1902年夏学期は月・木一時間ずつ、1903年夏学期は火・金一時間ずつ開講するはずであった（Adv）。
- (15) 大学会計掛による受講料納付記録用紙（Zahlungsliste）の記載状況はまちまちであり、統一性がない。ヴェーバーによる1897/98年冬学期の演習はたしかに開講されているが、受講料免除のため受講生の記載がない。ところが、1898年夏学期の演習は、受講料免除にもかかわらず受講生17名が記載されているのである。1899年夏学期、1899/1900年冬学期、そして当該の1902/03年冬学期の場合、演習の受講料納付記録用紙そのものは作成されているが、受講生の記載はない（UAH/Rep. 27/1409）。したがってこの三つの演習が実際に開講されたのか否か（受講生がいたのかいなかったのか）を判断するのはかなり困難である。しかしひとつ重要だと思うのは、1900/01年冬学期から1902年夏学期まで、および1903年夏学期にかんしては、大学会計掛の書類が一切遺されていないのに、1902/03年冬学期の演習にかんしてはたしかに書類が存在するということである。
- (16) すでに精神医学の見地から指摘されているように、鬱状態と比定されるみずからの病状について、ヴェーバーは驚くべき冷静な態度で自己分析・自己認識しており、そのたしかな病識は、その精神障害がもっともひどくなったときにおいてさえ失われることがなかった（海老原英彦・村上信行 1981-82（その1）：79-81）。
- (17) ヴェーバーが随時学生指導に当たっていたことは、演習を開講予告していない時期にも当てはま

る。1902年4月14日付母宛書簡のなかで、彼は、「私はゼミナール指導を除いて職務から退きました」と書いている (LB 1: 270, LB 2: 293)。ところが、この書簡の時期まで、記録上は、彼は三学期連続して講義も演習も開講予告しておらず、講義を休んで演習だけを開講していたという事実はない。ということは、この *Seminardirektion* は、正規の演習科目を指しているのではなく、記録には表れてこない私的・自主的なゼミ指導を彼が随時おこなっていたことをしめすものである。

- (18) ラートゲンの孫バルトルト・C・ヴィッテへの聴き取りによる (2004年8月30日)。1928年生まれのヴィッテは、1921年に亡くなった祖父との直接の接触はないが、長命を保った祖母 (未亡人) エミーリエ・ラートゲン (1867-1955) および母 (ラートゲンの長女) コルネリエ・ヴィッテ (1896-1984) からさまざまな情報を得ている。

- (19) 残念なことに、彼女の論文にたいするラートゲンの講評の大半は、当該文書がいちじるしく破損している (明らかに故意に破りとられている) ため知ることができない。

ディルク・ケスラーは、彼女が1901年にヴェーバーの許で学位を取得したかのように書いているが (Käsler, D. 1979: 22, 222), 正確でない。たしかに論文指導に当たったのはヴェーバーだが、彼女が1901年に学位を取得しようとしたとき、彼は休暇取得中だったから、直接審査に当たったのはラートゲンである。このとき、論文は評価されたものの、財政学と商法の筆記試験の成績が芳しくなかったため、彼女は学位取得に失敗している。ところが、彼女の論文は1901年の学位論文としてハイデルベルク大学図書館に所蔵されている。おそらく試験を受けなおして合格に漕ぎつけたのであろう。なお、ヴェーバー指導下の学位論文のリストをケスラーが作成している (ケスラー 1980/89: 66-67)。

- (20) 正確に言うと、ラートゲンは、1907年にベルンハルト・デルンブルクによって招かれてハンブルク学術財団 (学院の設立母体) に移籍し、翌年、ハンブルク拓殖研究院 (*Hamburgisches Kolonialinstitut und das allgemeine Vorlesungswesen*) の開学に参加し、学院運営にも積極的に関与している。この学院は、ドイツ帝国崩壊後に再編されてハンブルク大学へと改組される。その初代学長はラートゲンである。

- (21) ヴェーバーとラートゲンとの関係を考えるうえで、二人の交した書簡を利用できないことが大きな障害となっている。二人のあいだでかなりの数の書簡が交されていたことは、ヴェーバーが他の人に宛てた書簡から明らかである (たとえば MWGII/7: 596)。とくに、『社会経済学綱要』のなかの植民政策と商業・貿易政策にかんする分冊は、ヴェーバーの強い希望でラートゲンが担当することになっており (MWGII/5: 668, MWGII/7: 468, 598), ヴェーバーはラートゲンのいるハンブルクや (海外研修先の) アメリカに宛てて再三原稿の督促をしている (結局ラートゲンは『綱要』に寄稿することなく他界する)。またマリアンネも、1902年3月頃、ラートゲンに宛てて長い書簡を書いたと記している (LB 1: 265)。しかし二人の交した書簡はいまのところ一通もみつかっていない。第二次世界大戦末期および直後の混乱期に、ラートゲン遺稿集の全部とヴェーバー遺稿集の大部分はベルリンの公文書館から紛失し、現在にいたるまで行方不明である。そのなかに二人の往復書簡がまとめて収められていた可能性が高い。

#### [史料・文献]

- AdV: *Anzeige der Vorlesungen, welche auf der Grossherzoglich Badischen Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg gehalten werden sollen*. Heidelberg: K. Groos/ J. Hörning  
GLA 235/1830: Republik Baden. Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Diener Braune Dr. Wilhelm. Generallandesarchiv Karlsruhe  
GLA 235/2404: Grossherzogthum Baden. Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Diener Dr. Rathgen Karl Friedrich Theodor. Generallandesarchiv Karlsruhe

- GLA 235/2643 : Grossherzogthum Baden. Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Diener Dr. Weber Karl Emil Maximilian. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA 235/3140 : Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Dienst. Die Lehrkanzel der Staatswirtschaft, Finanz- und Polizeiwissenschaft, und die Besetzung der Bestellung. Nationalökonomie. 1821–1930. Teil 1. Generallandesarchiv Karlsruhe
- Honigsheim, P. 1963 : *Erinnerungen an Max Weber*. *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 15. 大林信治訳 1972『マックス・ウェーバーの思い出』みすず書房
- Käsler, D. 1979 : *Einführung in das Studium Max Webers*. München : C. H. Beck. 森岡弘通訳 1981『マックス・ウェーバー——その思想と全体像——』三一書房
- LB 1 : Weber, Marianne 1926 : *Max Weber; Ein Lebensbild*, 1. Aufl. Tübingen : J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
- LB 2 : Weber, Marianne 1926/50 : *Max Weber; Ein Lebensbild*, 2. Aufl. Heidelberg : Schneider. 大久保和郎訳 1963『マックス・ウェーバー』みすず書房
- MWGII/5 : *Max Weber Gesamtausgabe, II, Bd. 5, Briefe 1906–1908*. Tübingen : J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1990
- MWGII/7 : *Max Weber Gesamtausgabe, II, Bd. 7, Briefe 1911–1912*. Tübingen : J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1998
- Rathgen, K. 1907 : *Staat und Kultur der Japaner*. Bielefeld und Leipzig : Velhagen & Klasing
- UAH/IV/102/131 : Akten der Philosophischen Fakultät 1900–1901. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/PA 2408 : Personalakten. Weber, Karl Emil Max 1897–1920. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/RA 824 : Universität Heidelberg. Engerer Senat Protokollbuch 1894–1909. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/Rep.27/1026 : Akademische Quästur. Philosophische Fakultät. Professor Dr. Rathgen. Universitätsarchiv Heidelberg
- UAH/Rep.27/1409 : Akademische Quästur. Philosophische Fakultät. Prof. Dr. Weber Max. Universitätsarchiv Heidelberg
- 安藤英治 1972『ウェーバー紀行』岩波書店
- 安藤英治 1979/2003『マックス・ウェーバー』講談社
- 海老原英彦・村上信行 1981–82「マックス・ウェーバーの病跡——その生涯の病跡学的展望——」（その1）（その2）『日本病跡学雑誌』21, 23
- 亀嶋庸一編（今野元訳）2005『回想のマックス・ウェーバー——同時代人の証言——』岩波書店
- ケスラー（D）（大鐘武訳）1980/89「マックス・ウェーバーと初期ドイツ社会学の制度化——1909–1934年——」梶谷素久編『社会学の歴史』学文社
- 野崎敏郎 2005『カール・ラートゲンの日本社会論と日独の近代化構造に関する研究』（科研報告書）

〔付記〕

本稿は、平成 18–19 年度科学研究費（基盤研究(C)(2)）の助成を受けた個人研究の成果の一部である。手稿類の探索およびその判読のためにご助力を賜った各公文書館のスタッフの方々に深謝する。

（のざき としろう 公共政策学科）

2006 年 10 月 19 日受理